

ユア嬢令

治宰太

青空文庫

佐野君は、私の友人である。私のほうが佐野君より十一も年上なのであるが、それでも友人である。佐野君は、いま、東京の或る大学の文科に籍を置いているのであるが、あまり出来ないようである。いまに落第するかも知れない。少し勉強したらどうか、と私は言いにくい忠告をした事もあつたが、その時、佐野君は腕組みをして頸垂れうなだ、もうこうなれば、小説家になるより他は無いと低い声で呟つぶやいたので、私は苦笑した。学問のきらいな頭のわるい人間だけが小説家になるものだと思ひ込んでいるらしい。それは、ともかくとして、佐野君は此この頃いよいよ本気に、小説家になるより他は無い、と覚悟を固めて来た様子である。日、一日と

落第が確定的になつて来たのかも知れない。もうこうなれば、小説家になるより他は無い、と今は冗談でなく腹をきめたせいか、此の頃の佐野君の日常生活は、実に悠々たるものである。かれは未だ二十二歳の筈であるが、その、本郷の下宿屋の一室に於いて、端然と正座し、囲碁の独り稽古にふけている有様を望見するに、どこやら雲中白鶴の趣さえ感ぜられる。時々、背広服を着て旅に出る。鞆には原稿用紙とペン、インク、悪の華、新約聖書、戦争と平和第一巻、その他がいれられて在る。温泉宿の一室に於いて、床柱を背負つて泰然とおさまり、机の上には原稿用紙をひろげ、もの憂げに煙草のけむりの行末を眺め、長髪を掻き上げて、軽く咳ばらいするところなど、すでに一個の文人墨客の風情がある。

けれども、その、むだなポオズにも、すぐ疲れて来る様子で、立ち上つて散歩に出かける。宿から釣竿つりざおを借りて、溪流の山女釣やまめりを試みる時もある。一匹も釣れた事は無い。実は、そんなにも釣を好きでは無いのである。餌えさを付けかえるのが、面倒くさくてかなわない。だから、たいてい蚊針を用いる。東京で上等の蚊針を数種買い求め、財布に入れて旅に出るのだ。そんなにも好きで無いのに、なぜ、わざわざ釣針を買い求め旅行先に持参してまで、釣を実行しなければならぬのか。なんとという事も無い、ただ、ただ、隠君子の心境を味わつてみたいところからである。

ことしの六月、鮎あゆの解禁の日にも、佐野君は原稿用紙やらペンやら、戦争と平和やらを鞆にいれ、財布には、数種の蚊針を秘め

て伊豆の或る温泉場へ出かけた。

四五日して、たくさんの鮎を、買つて帰京した。柳の葉くらいの鮎を二匹、釣り上げて得意顔で宿に持つて帰つたところ、宿の人たちに大いに笑われて、すこぶ頗るまごついたそうである。その二匹は、それでもフライにしてもらつて晩ごはんの時に食べたが、大きいお皿に小指くらいの「かけら」が二つころがつている様を見たら、かれは余りの恥ずかしさに、立腹したそうである。私の家にも、美事な鮎を、お土産みやげに持つて来てくれた。伊豆のさかなやから買つて来たという事を、かれは、卑怯ひきような言いかたで告白した。「これくらいの鮎を、わけなく釣っている人もあるにはあるが、僕は釣らなかつた。これくらいの鮎は、てれくさくて釣れる

ものではない。僕は、わけを話してゆずってもらつて来た。」と奇妙な告白のしかたをしたのである。

ところで、その時の旅行には、もう一つ、へんなお土産があった。かれが、結婚したいと言ひ出したのである。伊豆で、いいひとを見つけて来たというのであつた。

「そうかね。」私は、くわしく聞きたくもなかつた。私は、ひとの恋愛談を聞く事は、あまり好きでない。恋愛談には、かならず、どこかに言ひ繕つくろいがあるからである。

私が気乗りのしない生返事をしていたのだが、佐野君はそれにはお構いなしに、かれの見つけて来たという、その、いいひとに就ついて澱よどみなく語つた。割に嘘の無い、素直な語りかただったの

で、私も、おしまいまで、そんなにいらいらせずに聞く事が出来た。

かれが伊豆に出かけて行つたのは、五月三十一日の夜で、その夜は宿でビールを一本飲んで寝て、翌朝は宿のひとに早く起してもらつて、釣竿をかついで悠然と宿を出た。多少、ねむそうな顔をしているが、それでもどこかに、ひとかどの風騒の土の構えを示して、夏草を踏みわけ河原へ向つた。草の露が冷たくて、いい気持。土堤にのぼる。松葉牡丹まつばたんが咲いている。姫百合ひめゆりが咲いている。ふと前方を見ると、緑いろの寝巻を着た令嬢が、白い長い両脚を膝ひざよりも、もつと上まであらわして、素足で青草を踏んで歩いている。清潔な、ああ、綺麗きれい。十メエトルと離れていない。

「やあ！」佐野君は、無邪気である。思わず歓声を挙げて、しかもその透きとおるような柔い脚を確実に指さしてしまった。令嬢は、そんなにも驚かぬ。少し笑いながら裾すそをおろした。これは日課の、朝の散歩なのかも知れない。佐野君は、自分の、指さした右手の処置に、少し困った。初対面の令嬢の脚を、指さしたり等して、失礼であつた、と後悔した。「だめですよ、そんな、——」と意味のはつきりしない言葉を、非難の口調で呟いて、颯さつと令嬢の傍をすり抜けて、後を振り向かず、いそいで歩いた。つまず躓いた。こんどは、ゆつくり歩いた。

河原へ降りた。幹が一抱え以上もある柳の樹蔭こかげに腰をおろして、釣糸を垂れた。釣れる場所か、釣れない場所か、それは問題じゃ

ない。他の釣師が一人もいなくて、静かな場所ならそれでいいのだ。釣の妙趣は、魚を多量に釣り上げる事にあるのでは無くて、釣糸を垂れながら静かに四季の風物を眺め楽しむ事にあるのだ、と露伴先生も教えているそうであるが、佐野君も、それは全くそれに違いないと思つてゐる。もともと佐野君は、文人としての魂こゝろを練るために、釣をはじめたのだから、釣れる釣れないは、いよいよ問題でないのだ。静かに釣糸を垂れ、もつぱら四季の風物を眺め楽しんでゐるのである。水は、囁ささやきながら流れてゐる。鮎あじが、ずっと泳ぎ寄つて蚊針をつつき、ひらと身をひるがえして逃れ去る。素早いものだ、と佐野君は感心する。対岸には、紫陽あじ花さが咲いいている。竹藪たけやぶの中で、赤く咲いいているのは、夾竹桃きょうちくとう

らしい。眠くなつて来た。

「釣れますか？」女の声である。

もの憂げに振り向くと、先刻の令嬢が、白いかんたんふく簡単服を着て立っている。肩には釣竿をかついでいる。

「いや、釣れるものではありません。」へんな言いかたである。

「そうですか。」令嬢は笑つた。二十歳にはなるまい。齒が綺麗だ。眼が綺麗だ。喉は、のど白くふつくらして溶けるようで、可愛い。みんな綺麗だ。釣竿を肩から、おろして、「きようは解禁の日ですから、子供にでも、わけなく釣れるのですけど。」

「釣れなくなつていいんです。」佐野君は、釣竿を河原の青草の上にそつと置いて、煙草をふかした。佐野君は、好色の青年では

ない。迂濶うかつなほうである。もう、その令嬢を問題にしていないという澄ました顔で、悠然と煙草のけむりを吐いて、そうして四季の風物を眺めている。

「ちよつと、拝見させて。」令嬢は、佐野君の釣竿を手に取り、糸を引き寄せて針をひとめ見て、「これじゃ、だめよ。鮎はやの蚊針じゃないの。」

佐野君は、恥をかかされたと思った。ごろりと仰あおむけ向に河原に寝ころんだ。「同じ事ですよ。その針でも、一二匹釣れました。」嘘を言った。

「あたしの針を一つあげましょう。」令嬢は胸のポケットから小さい紙包をつまみ出して、佐野君の傍にしやがみ、蚊針の仕掛け

に取りかかった。佐野君は寝ころび、雲を眺めている。

「この蚊針はね、」と令嬢は、金色の小さい蚊針を佐野君の釣糸に結びつけてやりながら呟く。「この蚊針はね、おそめという名前です。いい蚊針には、いちいち名前があるのよ。これは、おそめ。可愛い名でしょう？」

「そうですね、ありがとうございます。」佐野君は、野暮^{やぼ}である。何が、おそめだ。おせっかいは、もうやめて、早く向うへ行ってくれたらいい。気まぐれの御親切は、ありがた迷惑だ。

「さあ、出来ました。こんどは釣れますよ。ここは、とても釣れるところなのです。あたしは、いつも、あの岩の上で釣っているの。」

「あなたは、」佐野君は起き上つて、「東京の人ですか？」

「あら、どうして？」

「いや、ただ、——」佐野君は狼狽ろうばいした。顔が赤くなつた。

「あたしは、この土地のものよ。」令嬢の顔も、少し赤くなつた。うつむいて、くすくす笑いながら岩のほうへ歩いて行つた。

佐野君は、釣竿を手に取つて、再び静かに釣糸を垂れ、四季の風物を眺めた。ジャボリという大きな音がした。たしかに、ジャボリという音であつた。見ると令嬢は、見事に岩から落ちてゐる。胸まで水に没している。釣竿を固く握つて、「あら、あら。」と言いながら岸に這はい上つて来た。まさしく濡れ鼠のすがたである。白いドレスが両脚にびったり吸いついてゐる。

佐野君は、笑った。実に愉快そうに笑った。ざまを見ろという小気味のいい感じだけで、同情の心は起らなかった。ふと笑いを引つ込めて、叫んだ。

「血が！」

令嬢の胸を指さした。けさは脚を、こんどは胸を、指さした。令嬢の白い簡単服の胸のあたりに血が、薔薇ばらの花くらいの大さきでにじんんでいる。

令嬢は、自分の胸を、うつむいてちらと見て、

「桑の実よ。」と平気な顔をして言った。「胸のポケットに、桑の実をいれて置いたのよ。あとで食べようと思っていたら、損をした。」

岩から滑り落ちる時に、その桑の実が押しつぶされたのである。佐野君は再び、恥をかかされた、と思った。

令嬢は、「見ては、いやよ。」と言い残して川岸の、山吹の茂みの中に姿を消してそれっきり、翌日も、翌々日も河原へ出ては来なかった。佐野君だけは、相かわらず悠々と、あの柳の木の下で、釣糸を垂れ、四季の風物を眺め楽しんでゐる。あの令嬢と、また逢いたいとも思っていない様子である。佐野君は、そんなに好色な青年ではない。迂濶すぎるほどである。

三日間、四季の風物を眺め楽しみ、二匹の鮎を釣り上げた。

「おそめ」という蚊針のおかげと思うより他は無い。釣り上げた鮎は、柳の葉ほどの大ききさであった。これは、宿でフライにして

もらつて食べたそうだが、浮かぬ氣持であつたそうである。四日目に帰京したのであるが、その朝、お土産の鮎を買いに宿を出たら、あの令嬢に逢つたという。令嬢は黄色い絹のドレスを着て、自転車に乗つていた。

「やあ、おはよう。」佐野君は無邪氣である。大声で、挨拶した。令嬢は軽く頭をさげただけで、走り去つた。なんだか、まじめな顔つきをしていた。自転車のうしろには、菖蒲あやめの花束が載せられていた。白や紫の菖蒲の花が、ゆらゆら首を振つていた。

その日の昼すこし前に宿を引き上げて、れいの鞆を右手に、氷詰めみちの鮎の箱を左手に持つて宿から、バスの停留場まで五丁ほどの途を歩いた。ほこりっぽい田舎道である。時々立ちどまり、荷

物を下に置いて汗を拭いた。それから溜息ためいきをついて、また歩いた。三丁ほど歩いたところに、

「おかえりですか。」と背後から声をかけられ、振り向くと、あの令嬢が笑っている。手に小さい国旗を持っている。黄色い絹のドレスも上品だし、髪につけているコスモスの造花も、いい趣味だ。田舎のじいさんと一緒である。じいさんは、木綿しまの縞しまの着物を着て、小柄な実直そうな人である。ふしくれだった黒い大きい右手には、先刻の菖蒲の花束を持っている。さては此の、じいさんに差し上げる為に、けさ自転車で走りまわっていたのだな、と佐野君は、ひそかに合点した。

「どう？ 釣れた？」からかうような口調である。

「いや、」佐野君は苦笑して、「あなたが落ちたので、鮎がおどろいていなくなつたようです。」佐野君にしては上乗じょうじょうの応酬おうしゅうである。

「水が濁つたのかしら。」令嬢は笑わずに、低く呟いた。

じいさんは、幽かすかに笑つて、歩いている。

「どうして旗を持っているのです。」佐野君は話題の転換をころみた。

「出征したのよ。」

「誰が？」

「わしの甥おいですよ。」じいさんが答えた。「きのう出発しました。わしは、飲みすぎて、ここへ泊つてしまいました。」まぶしそう

な表情であった。

「それは、おめでとう。」佐野君は、こだわらずに言った。事變のはじまったばかりの頃は、佐野君は此の祝辞を、なんだか言いにくかった。でも、いまは、こだわりもなく祝辞を言える。だんだん、このように気持が統一されて行くのであろう。いいことだと佐野君は思った。

「可愛いがつっていた甥御さんだから、」令嬢は利巧そうな、落ちついた口調で説明した。「おじさんが、やっぱり、ゆうべは淋さびしがって、とうとう泊っちゃったの。わるい事じゃないわね。あたしは、おじさんに力をつけてやりたくて、けさは、お花を買ってあげたの。それから旗を持って送って来たの。」

「あなたのお家は、宿屋なの？」佐野君は、何も知らない。令嬢も、じいさんも笑った。

停留場についた。佐野君と、じいさんは、バスに乗った。令嬢は、窓のそとで、ひらひらと国旗を振った。

「おじさん、しよげちや駄目よ。誰でも、みんな行くんだわ。」バスは出発した。佐野君は、なぜだか泣きたくなつた。

いいひとだ、あの令嬢は、いいひとだ、結婚したいと、佐野君は、まじめな顔で言うのだが、私は閉口した。もう私には、わかっているのだ。

「馬鹿だね、君は。なんて馬鹿なんだろう。そのひとは、宿屋の令嬢なんかじゃないよ。考えてごらん。そのひとは六月一日に、

朝から大威張りで散歩して、釣をしたりして遊んでいたようだが、他の日は、遊べないのだ。どこにも姿を見せなかつたろう？ その筈だ。毎月、一日ついたちだけ休みなんだ。わかるかね。」

「そうかあ。カフェの女給か。」

「そうだといいんだけど、どうも、そうでもないようだ。おじいさんが君に、てれていたろう？ 泊った事を、てれていたろう？」

「わあっ！ そうかあ。なあんだ。」佐野君は、こぶしをかためて、テーブルをどんとたたいた。もうこうなれば、小説家になるより他は無い、といよいよ覚悟のほどを固くした様子であった。

令嬢。よつぽど、いい家庭のお嬢さんよりも、その、鮎の娘さんのほうが、はるかにいいのだ、本当の令嬢だ、とも思うのだけ

れども、嗚呼^{ああ}、やはり私は俗人なのかも知れぬ、そのような境遇の娘さんと、私の友人が結婚するというならば、私は、頑固に反対するのである。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年12月1日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：青木直子

2000年1月29日公開

2005年10月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ユア嬢令

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>